

《光昏》1955年(日本芸術院蔵)

三、四年ほど前になるが、早朝に田口駅へ降りた私はすぐ車で野尻湖ホテルへ向った。そのホテルは湖畔の人家や別荘のある側とは反対の方で、見晴しの良い岡の上にポツと一軒だけ建っていた。外観は洋風のかなり大きな建物で、どっしりした茅葺屋根が印象的である。ここから湖水をへだてて妙高、黒姫、戸隠、飯縄の嶺々が見え、対岸のなだらかな丘陵は手前の岸辺の樹木と美しく呼応している。

晩秋のよく晴れた朝であった。黒姫山は赤みを帯びた黄土色に輝いて見えた。湖水は紺青に澄んで岸辺の樹木の紅葉と鮮やかな対照を見せていた。黒姫の山麓を一字に横切っていた白い雲が、はじめのうちはじっとして動かないかに見えていたが、昼近くなるとむくむくと上昇して、山を蔽い隠した。秋の日は変り易いと云うが、またたく間に湖面は鉛色に翳って寒々とした情景になり、風が出て来た。私は外へ出て散歩する気持にもなれなかったし、又その必要もなかった。

この宿の部屋から見える自然の変貌の美しさは、いくら眺めていても飽きないものである。風が渡る度に光の縞が湖面を走った。樹々は梢を振って金色の葉を惜し気もなく撒き散らす。

翌日は雨が降ったり止んだりのうすら寒い日だった。ホテルのいろいろな部屋から見える風景をスケッチしたが、こんもり繁った琵琶島を浮べて湖水が広々と見渡せる部屋、対岸の別荘地帯の丘が近く迫って見える窓、山々が狭く湖水をとり囲んでいる場所と、なかなか変化に富んだ眺めである。樹木も窓やテラスに近くまた遠く、貴に赤に褐色にと、色とりどりに紅葉して、背景の眺望とうまく調和している。

私は居ながらにしていくつもの違った構図を取ることが出来た。野尻湖は夏来る場所と誰も思い込んでいるのか、泊り客は殆んど無く、静かで充分に写生していることが出来たのは幸いであった。

その翌年、春に来た時もホテルはガランとしていて、夏の混雑が想像も出来ない静けさであった。

もっとも春といってもまだ寒く、妙高は白く雪に蔽われ、黒姫も頂きに相当雪を残していた。湖畔にはもう春が訪れて、樹々は柔らかく芽吹き、桜であろうか、梢一杯に花をつけたのが見える。湖畔の陽だまりを鳥の声を聞きながら歩くのは気持がよかった。私は静かな林の中から光る湖面を眺めて、夏だけ野尻湖へ来る人は本当の野尻湖の美しさを知らないのだとつくづく思った。

晴れた朝、黒姫山がよく見えたときに私は別に深い考えもなく、この雄大な眺めをスケッチした。山を中央に描き湖水と近景の紅葉した樹々をとり入れた平凡な構図である。天候が悪くなって湖水の青さが消え、対岸の丘陵だけが見えるようになってから、かえって色彩的にも構図としても面白いスケッチが幾枚か出来た。

夕方近く雨があがった時は空も湖もオレンジがかかったグレーの色調になって、対岸の丘は逆光で紫色になり、近景の樹木がシルエットになって湖面に姿を見せているのは美しい対照であった。日本画家である私は、その場でスケッチはしても制作はかならず自分の画室である関係上、その時の写生も帰宅してから二、三枚は小品として制作した。然し、最



野尻湖ホテル(1937年建築)
建物は取り壊されてしまい、現在はありません。

初にした黒姫山の見えるスケッチはそのままになっていた。その理由は、空が青く湖水も青く、パノラマのようなこの構図では、到底ものにならないと思っていたからである。

或る時、ふとその捨てておいたスケッチを手にとって見ているうちに突然この空を金色にして湖水を黒く描いたらどうなるだろうかという考えが浮んだ。すると私の眼前に黒姫山が金色の空を背景にして逆光の紫金色に聳え、黒々とした湖水をはさんで岸辺の紅葉も夕かげの渋い色調で浮んで来た。

私は小さな紙にそのイメージを手早く描きとめた。構図も縦長のものになって十分に山と紅葉の樹木が入るようにした。それはもうパノラマ式の低俗なものでなく、私の心の中を濾過して創り出されたものであった。頭の中だけで考えられたもの、一時の思いつきと云うようなものだったら、私はこの構想を大作にまでもってゆきはしなかつただろう。多くの旅をしてその折々の自然を眺めている私には、この偶然にあらわれたかに見える色調も、空想ではなく実感として迫って来たものである。

この中にはいつも私の作品の基底を流れている一種の孤独な感情が、センチメンタルな悲哀感でなく、むしろ荘重なものとして表われてくる可能性があるのを感じた。私はこれを日展への出品作にすることに決め、翌年の早春に再び野尻湖へ行って黒姫山の写生をした。实景では前方の樹木が少し貧弱で、黒姫の雄大な量感を受けとめることが出来ない。そこで箱根姥子温泉の樹木がふさわしいのを思い出し、樹木は箱根で写生してそれを構図に入れた。

この作品は「光昏」と云う題名にしたが、光が昏れると云う意味である。自然に対して私は常に敬虔な気持を持っているが、自然は私達画家にとっては、心の中に醗酵して来て表現されることを希っている無形の何物かが、その姿を借りて形を得、色彩を得る手段である。

自然は又、私自身の反映であって、その中に深く深く自己を投入してゆくことによって、自然の微妙な心、即ち私自身の心の奥を見ることが出来る。

「光昏」は私にとって記念すべき作品の一つになった。

東山魁夷『泉に聞く』講談社文芸文庫1990年

《静晨》1994年(長野県信濃美術館蔵)

それは平成二年の春浅い二月、城山公園の一角にある東山魁夷館の起工式の日でした。長野の空はどんよりとした薄雲がたれこめていて、天幕の中では、おごそかな神主さんの声だけが伝ってきました。ふと外を見ると粉雪が舞いはじめていて、地面はところどころ白くなっています。式も滞りなく終わったので、亡夫の東山と私は近くの山の方へ冬景色を見るため車を走らせました。しばらく林檎畑を過ぎて山道へ入ると、もう一面に粉砂糖をまぶしたような白一色の世界になってきたのです。ところどころ黒い杉林が程良いアクセントを見せているのが目に入り、荒安の里の立札のところで車を止めました。すぐ窓を開けると東山は有り合わせの白紙を広げて鉛筆で走り描きをはじめましたが、この辺りは人も通らず何の音もしない静寂の気が満ちていて、全身が冷気に吸いこまれそうな、ひとときでした。翌日は以前から頼んであった墓地を知人に案内して貰ったのですが、偶然なことに昨日、車を止めたすぐ近くが花岡平霊園だったのです。

(東山すみ「開館十五周年を迎え思い出すままに」本展図録収録2005年)

〔夕星〕1999年（長野県信濃美術館蔵）

こうして東山の分身とも言える作品の数々を保管し、展示もして戴ける美術館が着工の運びとなり、終いの住家ともなる土地が確保出来た喜びで、子供の無い私達は、身も心も軽くなる思いで我が家へと戻った記憶がございます。その後、長野の東山魁夷館を設計して下さった谷口吉生先生に墓所の設計もお願いし、簡素な中に東山の筆になる、「自然は心の鏡」の色紙を型どったデザインを添えて戴き、心のこもった墓標が整いました。

ここからの眺めは眼前に菅平方面の山々が連なり、眼下には広々とした街並みの中に善光寺の大伽藍と美術館が冬枯れの頃には梢をすかして望むことが出来るのです。そしてお墓に向って正面を仰ぐと、ゆるやかな丘の中央の凹んだところに、六本の垂直な樹幹が伸びて並んでおります。これは霊園に眠る人達への卒塔婆のようにも見えてきます。又、或る時、当地在住の画家、斎藤俊雄さんが私に「東山先生の絶筆の絵は、ここのイメージをもとに描かれたのですか」と問われましたが、「いいえ、スケッチをしたことはありませんでしたけど」と返事をしたものの、よく見ると似たところがあることに気がつきました。

あの作品は先年、パリで展覧会を催した時に出逢った場所の印象で描きはじめていたのです。そこはパリ市外を抜けて車で一時間ほどの郊外に、もの淋しい小さな公園があって、その中に足を踏み入ると手前に池がありました。その水中の小島に石造りの棺が横たわっているのが見えました。ここも全く人影のない静寂境で、時々、小鳥の囁きだけが聞こえていたように思います。その場の雰囲気が入らしたらしい東山は、傍らに腰をおろして、しばらく瞑想にふけておりました。

その際の風情が忘れられず晩年になって少しづつ描き進めていたあの作品は、体力的にも弱っていたので、休み休みで時々筆を置いたりしていたのです。そして又、思い出したように描いていまして、これで一応完成と思ったところでサインを入れ印章も捺しました。しばらくすると再び絵筆を握りはじめたのですが、よく見ると魁夷の文字と判のところは塗りつぶしてありました。はじめはパリの風景でしたのに、少しずつ構図に変化も見られ、パリの空の下の情景がいつの間にか日本の、それも信州への想いが深くなり、花岡平に設けた永住の地へと心が移って行ったのかもしれませんが。今となっては問い正したくても、その人は誰にも別れを告げることなく一人、旅立ってしまいました。（東山すみ「開館十五周年を迎え思い出すまに」本展図録収録2005年）

これは何処の風景と云うものではない。そして誰も知らない場所で、実は私も行ったことが無い。つまり私が夢の中で見た風景である。私は今迄ずいぶん多くの国々を旅し、写生をしてきた。しかし、或る晩に見た夢の中の、この風景がなぜか忘れられない。たぶん、もう旅に出ることは無理な我が身には、ここが最後の憩いの場になるのではとの感を胸に秘めながら筆を進めている。

（東山魁夷未発表原稿）

《沼》1993年(長野県信濃美術館蔵)

ずいぶん以前に信濃路の旅で見つけた小さな白い花。それがいつ迄も心のすみに残っていた。帰ってから植物図鑑で調べたら「ミツガシワ」とのこと。それ以来、静かな沼に知れず咲いていた可憐で楚々とした花が忘れられなかった。

薄明の青い色の中で見た、その印象を描いてみた。

(東山魁夷自選画文集5『自然への讃歌』集英社1996年)

●水芭蕉について

水芭蕉の花は、私には馴染の深い花である。春の山旅で湿原に咲くこの花に出会うたびに、いつも心のときめきを感じる。

(東山魁夷『信州讃歌』求龍堂1995年)